



# 市民句会報

平成三十一年一月二十三日

オーテピア高知図書館（高知市民図書館）

○印 味元昭次選

順不同



昌子

○冬耕の名残のレタス届きおり  
「雪女」語りし声の温けし  
寂しきは目白の囀りきかぬ朝

農子

生きるとは聴いてみたしや雪女  
冬耕の放つ光や鍬洗う  
買初のスケッチブックより大き

初江

○雪女郎土佐に市原麟一郎  
○ダイケアへ母を送りて冬耕す  
除雪車の運転席に雪女

笛子

○流人墓一基は明治の雪女郎  
春耕の母の指先若返る  
番傘をさせば寄り添う雪女

富江

○遮断機の上り小走り雪女郎  
雨欲しいネ一言投げて冬耕へ  
初弾のピアノレッスン三姉妹



ゆの

○冬耕す風の伝言聴きながら  
洗面器のぞけば写る雪をんな  
句座の中紛れ入るなり雪女

美貴

○冬日差すがらくた市の女神像  
○鷺一羽従へ漢冬耕す  
離れては又寄り添ふて二羽の鴨

弘

○マハラジャの御立ち合には雪女  
冬耕の時折遠く見る夫婦  
帰る家待つ家消えて寒桜

丞子

○寅辰未未戌亥屠蘇祝う  
ひいばの笑い声撮る初写真  
春隣年長組の手話の歌

瑞枝

○夕映えに冬耕肩を緩めけり  
雪女郎夢かうつつか添い寝して  
腕白の居ずまい正し筆始め

郁代

○炉話の俚言多しや遠野旅  
冬耕や鍬を休めて背を伸し  
雪女郎真実籠る遠野かな



郁子

初暦予定書き込み動きゆく  
ひむがし  
東の空持ちあげて大春月  
朝一番五臓六腑に寒の水

まり

○年の夜や父のスマトラ従軍記  
のら猫の片足利かず寒の入り  
寒月の輝く中に君といて

酔花

○ひとすじの陽や冬耕の父の背中  
○バスまでが怒ったような冬の朝  
ワイパーも懸命なりや雪女郎

佐和子

○暮れ残る冬耕の背に声かけし  
○良き友をそと宙に誘いし雪螢  
白壁の古町迷う雪女郎

文子

冬耕の終りし畑黒々と  
羽として冬眠の蝶静かなり  
冬霧にすっぽりつつまる白峰寺

味元 昭次 作品

廃校の門扉にちし雪女郎  
雪女に夜間中学のこと告げる  
冬耕の一鍬二鍬明日も晴



